いかして守ろう
日本国憲法

日本国憲法
〈1946年11月3日制定、1947年5月3日施行〉

憲法をいかす福島県民の会

「憲法を活かす新作講談集発売！」

神田香織（講談師）

今夏の参院選を思うとき、多くの方の支持を受けて参院選挙に立候補した九年前が鮮やかに甦ってきます。あの夏は特に暑くて身が焦がれるようでした。身が焦がれる思いは気温のせいばかりではなく、そう、小泉首相が誕生し、あっという間に自民党の支持率が八〇パーセントと上昇していった焦りもあったのだと思います。「小泉の構造改革に力を！」というポスターが町中に氾濫し、テレビも連日小泉元首相を追いかけている逆風の中、私は「小泉の構造改革に力を貸して、自分の会社を倒産させないで、自分のお店をつぶさないで」と訴えて支持者の皆さんとともに県内を走り回っていました。

結果、自民党を大勝させたあの選挙によって、日本は閉塞感に満ちた格

差社会となり、年間三万人以上もの方々が自殺する国となってしまった。

「はだしのゲン」を通じて戦争がいかに無惨なものかと訴えて来た私は、アメリカに追随して戦争に加担する流れに抗したいと国政の場に打って出たものの力及ばず。

この貴重な経験はその後の私の講談に対する姿勢を変えてゆく事になります。講談をわずか一〇〇人に満たないマイナーな芸人のものにしておくのは勿体ない。この勢いのある話芸を庶民の武器にできないだろうか？憲法を活かす講談ができないだろうか？と。

宣伝で恐縮ですが、今春発売の「乱世を生き抜く語り口を持て」はそうした私の集大成で「憲法を活かす」新作講談集です。

昨秋「憲法を活かす福島県民の会」が主催の「平和と人権のつどい」が福島県内四ヵ所で開催され「国鉄労働者（ぽっぽや）義士伝を語らせていただきました。日替わりで呼びかけ人の先生方、鎌倉孝夫氏、藤野美都子氏、栗原るみ氏、高橋哲哉氏の講演と講談の一席でその時の様子も紹介してあります。

何よりうれしいのは、「ＪＲ不採用」で二三年間戦って来た国労闘争がやっと解決を見たその二日後の四月一二日、都内でこの本の出版記念会が開催され、呼びかけ人の一人である二瓶久勝（国鉄闘争共闘会議議長）のはずむような挨拶を聞く事ができたことです。ちなみに二瓶さんも福島県人です。

どんな内容か気になると思いますので、講談教室の生徒さんの感想文と「ふぇみん」の書評

を紹介して、私の憲法への思い、県民の皆さんへのアピールにかえさせていただきます。

この本の特徴は第一部の「講談（かた）る門には福来る」ではなかろうか。そこには、講談を自らの職業としてではなく、日々の生活の中で講談を活かし、語り口を学ぼうとする人たちの姿が見事に活写されている。東京での「講談サロン『香織倶楽部』」の活動およびそこで生まれた作品、林須美さん獄中訪問記と弟子入りの経緯、名古屋の「劇団うりんこ」での「講談ワークショップ」とそこで生まれた作品、さらには常磐湯本での「講談教室」、石川町での「石川講談塾」の活動紹介などが満載されている。

落語家と比較して講談師の本は少ないが、これまで出版されてきた講談師の本は、講談や講談界についての自分の考えや日頃の活動、そして自分の創作の掲載が大半である。中には弟子のことについて触れた箇所はあるものの、この本のように丸々前半の一部全部に紙面を割いたものはないのではなかろうか。ましてやそれも講談協会の弟子ではなく、いわゆるアマチュアと言われる教室生について書かれたものは皆無といえる。

筆者は、なぜそれに多くの紙面を割いたのであろうか？その理由は、第二部の神田香織創作講談に貫く精神にもつながる問題でもあるが、「理不尽な思いや亡くなり方」をした人たちの立場から、「庶民の怒りを代弁する話芸」としての講談の復活、再生を願ってきた筆者の講談観が根底にあるといえる。この本のタイトルである「乱世を生きる語り口をもて」が対象とす

る読者は、この社会でいかに生きるかを日々呻吟している人々である。それらの人が、勇気凛々、天下無敵な語り口、生き方を少しでも身につけてほしいと願って出されたのが、この講談本だといえる。

この国は、昨年三万二、七五八人の自殺者を出した、という。まさに大量殺戮に等しい数だ。この十余年、毎年三万人の自殺者を出しているこの国が、「平和」で「豊か」と言えるだろうか。格差・貧困が拡大する中でワーキングプアに対して「諦めるな！死ぬな！生き延びよ」と訴えつづけても自殺者は依然として減らない。自分の悩み、怒りを表現できない多くの人々に寄り添い、その人たちの思いを代弁する文化、闘いが少ないことにも起因する。

「庶民の怒りを代弁する話芸」は、この時代を乱世（変わりうる、変えていくべき過渡期）として捉える視点があれば、プロ、アマの区別を超えたところから真の芸人が生まれるのではなかろうか。そうしたことを気付かせてくれる貴重な本だと言える。（高橋織丸）

〝社会派〟女性講談師として大活躍の神田香織さん。多くの人に社会変革の〝武器〟を持ってほしいと、二〇〇七年からは、講談サロン「香織倶楽部」を主宰し、各地で「話し方」「講談教室」を開いている。この本には、一九七七年の米軍ジェット機墜落を取り上げた「哀しみの母子像」、国鉄闘争の二〇年を問う「国鉄労働者（ぽっぽや）義士伝」など、五つの神田さんの新作講談のほか、お弟子さんたちの講談づくりを通して「講談」の魅力をあますところな

く伝えている。八六年に「はだしのゲン」を発表して以来「社会派」と呼ばれる事に対し、尾崎秀樹著「大衆芸能の神々」の言葉を引いて、もともと「講談は怒りを代弁する話芸」と語る神田さん。「『理不尽な死』を強要された人の怨念を一手に引き受け」、誰にでもわかりやすい語り口で、しっかりと問題の根っこを伝えていく。古くから民衆が武器にしてきた、この優れた話芸を学びたくなった。（「ふぇみん」）